

初年次教育を意識した図書コレクションの構築の試み（1）

千葉 聡子* 藤倉 恵一**

Assembling a collection of books for the education of first-year students

Akiko CHIBA, Keiichi FUJIKURA

要旨 本稿は、2007年度から始まった本学教育学部の初年次教育の担当者と図書館員によって生み出された「初年次教育を意識した図書コレクション」の誕生までのプロセスと、2019年度の利用状況についての分析結果を述べるものである。このコレクションは大学生の主体的学習を支援することと調査等から明らかになった本学教育学部の学生の弱さを克服するために、初年次教育である基礎演習の担当者によりその作成が提案されたものであり、提案に対して図書館が強力にサポートすることで実現した。またこのコレクションは図書館内部にあるものの、その目的を実現するために独自の書棚としての特性を備えている。2019年度の利用状況のデータはその出発点としてのデータであり、今後もデータの収集が必要であることと、このコレクションの特性を学生の読書活動へとつなげていくための工夫の必要性が明らかになった。

キーワード：初年次教育 読書 図書館 図書コレクション

1. 初年次教育と文教大学教育学部での初年次教育の位置づけ

（1）初年次教育とその内容

本稿は、文教大学教育学部で行われている初年次教育科目「基礎演習」から生まれた、大学1年生向けの図書コレクションの誕生のプロセスと設置初年度の利用について述べるものである。

初年次教育は既に大学の新入生向けカリキュラムとして定着し、その教育内容や方法、また運営についての研究も進んでいる。我が国において初年次教育をリードする「初年次教育学会」は2008年に設立されており、学会の設立趣意書によると、初年次教育は、1970年代後半から80年代前半にかけて、アメリカの多くの高等教育機関で導入

され、その後世界に広がっていった教育プログラムであることがわかる。この広がり背景には、「高等教育のユニバーサル化の進行に伴い、多様な学生が高等教育に進学するようになる一方で、卒業時の質保証が求められるようになり、入学した学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功に水路づける上で初年次教育が効果的である」という初年次教育への評価がある（初年次教育学会 2007）。

また文部科学省は初年次教育を「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」（文部科学省 2020：14）と定義しており、初年次教育の

* ちば あきこ 文教大学教育学部教職課程

** ふじくら けいいち 文教大学越谷図書館

趣意書も学校の接続時に大学教育への適応のための科目が必要であることを示していることから、高大接続のために重要な科目として初年次教育が広く認識されているといえる。

また、2014年に出された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について一すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために―（答申）」でも同様のことを確認することができる。以下は答申内での初年次教育についての記述である。

初年次教育は、高等学校で身に付けるべき基礎学力の単なる補習とは一線を画すべきであり、高等学校教育から大学における学修に移行するに当たって、大学における本格的な学修への導入、より能動的な学修に必要な方法の習得等を目的とするものとして捉えるべきである。

こうした大学初年次教育の展開・実践は、高等学校教育の成果を大学入学者選抜後の大学教育へとつなぐ、高大接続の観点から極めて重要な役割を果たすものであり、その質的転換を断行するには、高等学校教育、大学教育の新しい姿を確立するとともに、これらの教育で育成すべき力を円滑に接続するための研究開発が必要である。（中央教育審議会：21）

このように、先の定義でもその後に出された答申からも、高大接続にあたって学習の質的転換が必要な状況は続いており、具体的には「能動的な学修」のために必要な「方法」の習得が初年次教育の目的であることがわかる。

（2）継続する学習を支えるものとしての初年次教育

しかしこの「能動的」な学習は、以前から、また小学校教育段階から求められている学習であるとも言え、「高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり」

とあるような定義が適応できるのかという疑問はある。例えば、これまでの小学校学習指導要領を振り返ってみると、現在からおよそ30年前の平成元年の改訂では改善の留意点の一つとして、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること」、また次の平成10年の改訂にも「多くの知識を一方的に教え込む教育を転換し、子どもたちの自ら学び自ら考える力の育成を重視すること」とあり、「自ら」という表現ではあるが「能動的学習者」の育成が小学校段階から、また少なくとも30年近く前から目指されていることがわかる（文部科学省2018b：152-4）。

また、文部科学省の調査によると、2017年度段階で97%とほぼ全ての大学で初年次教育が実施されている。内容をみると、「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」は91.3%の大学で実施、「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」は83.5%、「学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム」が79.6%、「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身に付けるためのプログラム」78.5%、「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」77.7%と続く。この具体的内容を見ると、いずれも大学で初めて学ぶ事柄とは考えられない内容であることがわかる（文部科学省2020：14）。

2014年の答申で述べられているように、高等学校と大学の教育が質的に異なることは疑いのない事実であるが、その接続のために設定された初年次教育の内容は、本来であるならば高等学校までの教育で身に付ける内容の側面が見られる。その意味で、初年次教育自体は新しい大学教育の科目と見ることはできるが、その新しさは、初年次教育を科目として設定したことにより、内容に関しては、答申が述べる「高等学校で身に付けるべき基礎学力の単なる補習とは一線を画すべきであり」とは異なり、「基礎学力の補習」として初年次教育を捉える必要があると考える。問題はどの

大学でも「高等学校で身に付けるべき基礎学力の単なる補習」が必要であり、その点でそれぞれの大学が工夫を迫られているということが現実であるということである。

本稿が扱う「初年次教育を意識した図書コレクションの構築」も1年生の読書活動を活発化させるための試みであり、後述するが、本学部の初年次教育である「基礎演習」を開始して数年後に授業担当者から「高等学校で身に付けるべき基礎学力が身に付いていないのではないか」という発言から始まったものであることを記しておきたい。「読書」は学習の基礎にあり大学教育のみならず小学校段階から学習を土台から支えるものとして重視され続けているが、大学で「読書」に注目した初年次教育が求められる背景には、「基礎学力の単なる補習とは一線を画すべきであり」と定義される初年次教育の理念とは異なる実態があることを加えておきたい。

（3）文教大学教育学部での初年次教育の位置づけ

さて次に、文教大学教育学部での初年次教育について説明しておこう。

文教大学教育学部での初年次教育は、2007年度のカリキュラム改定により、学部共通科目「基礎演習Ⅰ」として1年次の春学期に設定された。教育学部のカリキュラムは「共通教養科目」「外国語科目」「体育科目」「学部共通科目」「専門教育科目」に分かれており、専門科目は大部分が免許等取得のための科目になるが、「学部共通科目」は比較的自由に科目が設定できる枠となっており、大学生としてこれから学んでいくために必要な知識や技術を習得する必修科目として「基礎演習Ⅰ（後に基礎演習に名称変更）」をこの枠に置くこととなった。

また「基礎演習」は2年次秋学期の「基礎演習Ⅱ」（後に「教育課題演習」に名称変更）、さらに4年次通年科目である「卒業研究」という、いずれも必修科目による積み上げ式の科目のスタートとして位置づけられた。「基礎演習」から「卒業

研究」へと続くこの科目群は、教員養成を目的とし免許取得のための科目で専門科目がほぼ構成される教育学部のカリキュラムの中では、より学生の興味・関心を重視し、大学で求められる研究活動につなげていく科目群という特徴をもつ。

また教育学部学校教育課程では、「基礎演習」のクラス編成は9専修を分解する形でのクラス設計をし、内容も緩やかではあるが共通性をもたせるようにしている。2007年度の授業開始直前から担当者で打ち合わせを行うこととし、打ち合わせ会は現在も継続している。この打ち合わせ会にて、学校教育課程の「基礎演習」の目標を「形式・内容ともに大学生としての必要な基準を満たしたレポートを作成する」として教科書も統一することを決定した。なお、2007年度のスタート時から2019年度までは、教育学部の「学校教育課程」と「心理教育課程」の「基礎演習」の運営は分離して行われていたが、2020年度の「心理教育課程」から「発達教育課程」への改組時に教育学部全体で初年次教育としての「基礎演習」の授業目標、テキストの統一を行い、教育内容についての緩やかな共通化、また情報交換を拡大、継続して行っている。

2. 大学教育における「読書」の重要性

（1）「書くため」に必要な「読むこと」

さて、本稿は「基礎演習」の受講者にターゲットを絞った「図書コレクション」の構築について述べるものであるが、「図書コレクション」の構築に至る背景には、この科目が誕生した時からの科目担当で定期的に情報交換を行う打ち合わせ会の存在がある。

打ち合わせ会1回目は授業開始3か月前の2007年1月に開かれ、担当者の変更はあるが現在まで継続している。また1年目に決めた「大学で受身ではなく主体的な学習・研究を行っていくために、これまでも行ってきた『書くこと』『読むこと』『調べること』『発表すること』『話し合うこと』などをもう一度正確に捉え直し、自分で課題

を発見し自分で課題に迫っていく研究を実践していくための基礎的な知識や技術を身に付けることを授業の目的とする」という授業の目的は変わっていない。最終目標として設定した「形式・内容ともに大学生としての必要な基準を満たしたレポートを作成する」ことも変更していない。この目標を学生が達成するためにどのような授業を展開する必要があるかということ念頭において、授業内容の検討、また学生の能力や資質などについての意見交換、情報交換を行ってきた。

この打ち合わせ会の記録を振り返ると、授業が始まって2年目になるころから授業のキーワードとして「自分の命題をつくる」、「批評する力をつける」、「学ぶとは何かを考える」、「発信する力をつける」などがあがっており、初年次教育としては「読む力をつける、自分の読み方をする、クリティカル・リーディングの力をつける」、「『読む力』をつけた後、『自分の考えをつくる』、『その考えを他者にどのように伝えるか』ということが学ぶ内容になるのではないか」というように、「書くこと」の前提として「読むこと」の重要性が指摘され始める。

またこの「基礎演習」が始まってから10年後の2017年の記録には「形式・内容ともに大学生としての必要な基準を満たしたレポートを作成する」ことを1年次春学期で達成するのは難しいとの意見が出始め、この難しさの理由として「自らの『問い』を立てることが難しいのではないか」ということがあがっている。

こうした学生の状況分析を経て、授業の目標の中心を「読むこと」に置き、専門図書、論文、新聞記事、また統計データなどを読みこなせるようにすること、またクリティカル・リーディングができるようにすることが共通に認識された。そして「読むこと」の結果として「書くこと」があることを現実にもどのように授業に取り組むかが課題となった。

このような議論の中で、大学生としてのレポートを書くためには、第一に、本を数冊読み、主張

をまとめ、そこから主張の妥当性を問うこと、第二に、論文の構成を提示し、批判的視点を組み込んだ形で引用などを行い、結論に至る文章を書くこと、が必要であり、この目標を達成するために「基礎演習」科目を「知の世界の広がりを感じ、理解させ、自分のこれまでの世界に揺さぶりをかける。視野を広げる。また知を追求することの意味を見出させ、この授業を、知を追求することができる人間の育成の入口とする」と性格づけるに至った。またこの目的を達成するための一つの装置として、図書館からの協力を得て、図書館内に基礎演習を支える本棚を作ることが提案された。その後、この本棚作成を通しての初年次教育に関わる読書についての研究を進めることも提案され、2018年度、2019年度、2020年度に基礎演習担当者による共同研究が行われることになった。

そこで次に、初年次教育を履修する文教大学教育学部学生の特徴をより客観的に把握しておこう。

(2) 文教大学教育学部学生の特徴と読書

本稿の筆者の一人である千葉は教育学部学校教育課程の学生を対象に、初年次教育担当者である中本敬子と2009年度と2010年度に、また同じく担当者の佐藤正伸と2017年度に質問票による『高校生活と大学生活の連結についての調査』を行っている（2009年度と2010年度調査は2009年度調査として一括して分析している）。

調査目的は文教大学教育学部学校教育課程の学生の特徴を把握することであり、把握した特徴から初年次教育の在り方を再度検討することにある。どちらの調査でもBenesse教育総合研究所が行った『大学生の学習・生活実態調査』と比較できるように設計した。また2009年度調査と比較が可能になるように2017年度調査は設計した。これら2つの調査から明らかになった文教大学教育学部学生の特徴を以下に簡単に示そう。

・2009年度調査、2017年度調査ともに、文教大学教育学部学校教育課程学生は、教員になるという目的を明確にもって入学しており、Benesse

調査との比較でもこの目的意識の明確さは際立っている。

- ・2009年度調査から他大学の学生と比較して、「サークルや部活動」「学校行事やイベント」「社会活動」「アルバイト」の4つの活動が活発でありこの点に文教大学教育学部学校教育課程学生の特徴がある。また、いわゆる大学活動の中核となる「大学の授業」「大学の勉強以外の自主的な勉強」「読書」は相対的に低い状況にあり、この点に教育学部学校教育課程学生の課題があると考えられる。
- ・しかし2017年度調査では2009年度調査で活発であった4つの活動の活動率が下がり、2009年度調査で弱さと考えた「大学の授業」「大学の勉強以外の自主的な勉強」「読書」活動は依然として消極的で変わりがなかった。
- ・また2009年度の調査から「授業」と「自主的な勉強」とでは求められる学習への姿勢が異なり、高校までに身に付けてきた「まじめ文化」は大学文化と異なる側面があり、さらに「自主的な勉強」には「まじめ文化」とは異なり大学文化といえる「学問的理念・思考法」が関係することがわかった。

また本稿で注目している「読書」についての数値を示しておこう。調査では「大学生活で力を入れてきたこと」として10項目あげて答えてもらった。2009年度調査、2017年度調査の3年生の「読書」の数字をみると2009年は31.7%で10項目中7位、2017年は22.1%で8位となっている。Benesseの全国調査と比較するとBenesseの2008年調査では40.2%、2012年調査では46.3%である。また順位は両年とも4位である。Benesse調査と比較して文教生の数値、順位ともに両年とも低く、またBenesseの全国調査の数値は2012年に増加しているのに対し文教生が2017年になって数値が低くなっており、文教大学教育学部学校教育課程の学生の読書に対する消極性は課題であると見て取れる。なお本稿のテーマが初年次教育であるにもかかわらず3年生のデータをあげたのは10の

活動項目の中に1年生では経験しないような活動が含まれていたからである（千葉 2011, 2012, 2018）。

（3）新入生と読書

読書が大学生にとってどのような意味を持つのかという問いは、問う必要があるのかといった類の問いといってよいだろう。情報の取得方法としてスマートフォンやパソコンの利用が大きな意味をもちはじめ、場合によっては大学図書館に行かなくてもレポートは作成できるという時代になりつつあるのかもしれない。しかし、読書をしない大学生に対して問題を感じない時代にまだ私たちは到達していない。

読書指導は学校教育において重視されており、2001年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が成立し、法律により現在「第4次 子供の読書活動の推進に関する基本的な計画（2018-2022年）」が実施されている。この基本計画を見ると、小中学生の読書率は中長期的には改善傾向にあるが、高校生の不読率は依然として高く、学校段階が上がるにしたがって高まる読書離れの傾向は改善されていないことがわかる。また第4次計画では読書への関心を高める取り組みをさらに行っていくことが示されている（文部科学省 2018a）。

この計画では大学生の読書状況については触れていないが、全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」によると、読書習慣のない学生を2013年から追っていくと、2013年の40.9%から毎年増加しており、2017年には53.9%にまで増加しており、読書離れは大学生の課題でもあることがわかる（浜島：79）。

後に詳細に提示するが、今回の「初年次教育を意識した図書コレクション」は比較的新しい本、また読み易い本を選んでいる。本棚には漫画や高校生向けに書かれたと思われる本も含まれている。初年次教育が高等学校と大学の接続を目的としていることから、1か月前まで高校生であった1年次学生をターゲットにしたコレクションであ

ることがこのような選書を行った理由の一つである。しかし理由は他にも考えられる。

読書習慣がない学生の増加に対して浜島幸司は、学業が大学においてメインカルチャーであることは今後も変わらないとした上で、「読書習慣は必ずしもメインカルチャーとは限らない。かつては大多数を占めていた行動であったとしても、現状では半数による行動になっている。むしろインフォーマルな側面として読書習慣を捉える視点があってもよいのではないか」（浜島：85）と述べている。

このように考えると、これまで捉えられてきた大学生活における読書とは異なる視点で大学生の読書を捉えることが必要であり、初年次教育における読書指導は、大学生活における読書への転換を図るための役割を果たすものとして考えざるを得ない現実がある。読書とは能動的行動であるが、大学における能動的活動を支えるためには「装置としての図書コレクション」が必要であるということから、「初年次教育を意識した図書コレクションの構築」の試みが始まった。

（千葉聡子）

3. 図書コレクションの構築と開設

（1）図書館員の参画と選定方針の策定

基礎演習の担当者間でコレクション設置計画が具体化しはじめたのと並行して、図書館の主任司書（本稿共著者である藤倉）に設置計画が打診された。図書館側から選書・蔵書構築を検討する担当のうち藤倉を含む2名がこの設置準備の打ち合わせに参加した。

2018年度前半の計画初期の段階では、選書については教員主導で行う方向で、図書館は主に管理面（分類や配架）や、研究上のデータ提供の相談に応じる「研究協力者」としての役割だったが、その後の検討の結果、主任司書の藤倉が「共同研究者」として参画することになり、選書や提供面での図書館側担当者となった。

続いてコレクション設置にあたり、方針の明文

化こそしなかったが、教員側と図書館側でおおむね次のような方向性を協議・検討し、次のようなことが初期の検討記録に残っている。

- ・図書館本来の蔵書との関係・整合は考慮せず、既に図書館に所蔵があってもコレクションの対象とする。
- ・対象領域は主として教育分野だが、時事的な資料やレポート・論文の書き方、教育に関わる教養書やエッセイも含めることとする。
- ・特に初年次学生を対象とすることから、多少「やわらかめのもの」を意図した選書を心掛ける。実際、新書も相応の数・種類を選んだが、中でもヤングアダルトを主な読者層とした「ちくまプリマー新書」（筑摩書房）や「岩波ジュニア新書」（岩波書店）などからも多くを選び、また、漫画形式の資料（例：前田康裕『まんがで知る教師の学び』さくら社）も対象に含んでいる。また、事典類についても関連する主題のものをいくつか含むこととした。
- ・それなりにジャンルの幅は広げるにしても、必要に応じて図書1タイトルにつき複数同じもの（複本）も設け、貸出の機会を広く確保する。
- ・複本は「1タイトルにつき2冊」と限定するのではなく、たとえば読書会などの機会を考え10冊買うという選択肢もある。

一方、計画に時限を設けることと、管理上の事情から、逐次刊行物（雑誌や白書等）は対象としないことも確認した。ただし内容の性質上、唯一『図表でみる教育：OECD教育インディケータ2018年版』（ぎょうせい）は購入している（他の年次は図書館で所蔵している）。

（2）コレクション資料の選定（第1次選定）

2019年度からのコレクション開設に向けて、2018年12月、まず基礎演習担当教員相互で情報を出し合い、核となる資料として42タイトル・83冊の図書を選定した。これらはすべて2冊ずつ複本として購入した（書店在庫での欠品1冊を除く）。なおこの「タイトル数」は単行書としての数であ

り、上下ものやシリーズものなどは分割して数えている（以下同様）。

続く2019年2月、主任司書を交えて都内の大型書店の店頭で直接選書を実施した。これに参加したのは教員2名・図書館1名の計3名であり、以下の手順で選定した。

- ① 3名それぞれが教育関係図書の売り場を中心に、その他領域の図書も各自の裁量により必要と思われるものを選んだ。
- ② 続けて教養書・新書の売り場で、3名で相談しながら資料を選び出した。
- ③ これらを示し合わせ、意図しない重複は除外し、逆に複本として備えるべき資料を選び出して書店に購入の意を伝えた。

特にこの①の過程で相応の重複が出ることを予期していたが、それぞれの専門領域が異なるためかそれほど重なり合うところはなく、バラエティ豊かな選定となった。この店頭選書の結果として、97タイトル・119冊を選定・購入した。

こうして2018年度中に、139タイトル・202冊の図書が用意できた（第1次選定分）。

（3）コレクション資料の拡充（第2次選定）

コレクションの設置と運用については4節で詳述するが、諸般の事情から開設は2019年5月下旬にずれ込んだ。そして、同年度中に若干資料の追加があった。ひとつは前項・最初段階で欠品となっていた複本が届いたこと（1冊；7月）と、教育学部教員有志から図書の寄贈があったこと（15冊；10月）である。

そして2019年度末（2020年1～2月）に、新年度に向けて図書の追加選定を行った（第2次選定）。スケジュールの都合で店頭選書が困難だったため、教員と主任司書がカタログで選書を行った。選定はこれまでの方針に沿ったうえで、第1次選定以後に刊行されたものを中心に、55タイトル・61冊の図書を追加した。特に第1次選定で貸出が伸びていた漫画形式の資料について、続刊や他主題のものについても対象とした。

2020年度開始時点では、209タイトル・279冊が書架に存在していることになる。

ただし、これらが配架されたのは3月に入ってからであり、まもなく新型コロナウイルス感染症対策のため図書館が臨時閉館（4～7月）を余儀なくされ、その後も条件つきでの利用という状況もあって、想定した利用ができていない（2020年9月現在）。

（4）資料の分類方針

一般論として、図書館で提供される資料（群）は排列／検索／利用／管理といったそれぞれの理由から、なんらかの分類を必要とする。それはリスト（目録）上における分類の場合もあるが、特に書架に図書を排列するにあたっては、主題別に利用者に提示するために、書架分類法を必要とする。すなわち図書がもつ主題をなんらかの手段によって記号化し、図書に明示してその順に線形に配置するのが一般的な方法であり、世界各国・大多数の図書館では十進分類法を用いて主題（学問分野）をアラビア数字によって記号化して図書の背にラベル等で示す方法を採用している。

現代の日本では、館種をとわずほとんどの図書館で『日本十進分類法（NDC：Nippon Decimal Classification）』を用いており、越谷図書館でも教科書（文部科学省検定済教科書等）や視聴覚資料など一部の資料群を除いてこのNDCで蔵書を分類している（現在は2014年に改訂された新訂10版が主に用いられる）（もり・日本図書館協会：2014）。

本節冒頭で示した検討の初期段階において、このコレクションの分類にNDCを用いるかどうか、少し議論があった。

- ① NDCを用いれば、このコレクションで興味を覚えた主題につき、類似・関連する内容の図書館蔵書へのアプローチが容易になる（ラベルと同じ／近い分類記号の書架をブラウズすれば、多くの関連資料を知ることになる）。
- ② NDCを用いれば、このコレクション内での資

料排列順に明確な根拠ができる（学問体系の順に拠る）。

- ③このコレクションは一般書架から独立しており、同じ分類としてNDCを用いる必要はない。学問的に厳密な主題を示すよりも、その分類の概念（コンセプト）によって本を大別すれば十分ではないか。
- ④コレクションの大半は教育関係図書であって、NDCを用いてもほとんどの資料が37（教育）の下に集まり、偏ってしまう。一方でそれ以外の主題の図書が「その他」のように少数ずつ分散してしまう。NDCを使用すると、このコレクションの棚に線形排列した際「その他の分野」→「教育」→「その他の分野」という順序を形成することになり、配架上効果的でない。

これの論点①②は図書館管理上の理由、③は研究・教育者側からの発言のように見えるが、実際は逆であり、④も含め「NDCによる分類は効果的でない」という意見はむしろ図書館のほうに強かった。議論に時間はそれほどかからず、このコレクションでは独自の分類を設けるということに決定した。

（５）分類の策定と適用、検証

分類案の策定は、教員主導で行った。

検討は資料の選定とほぼ並行して進み、a～jの10区分が提示された（表1）。この案が確定したのは3月中旬のことであった。

<表1 コレクションの分類>

分類	分類名
a	教育って何、学んで何
b	教師として働く、生きる
c	社会の中の学校
d	多様なこどもの心、育ち
e	子ども世界、一人ひとりを支える
f	変わらなければいけない学校
g	子どもをとりまく環境
h	常識を破れ
i	未来から目をそらすな
j	私は大学生なんだから

これは通常の図書分類法のように概念を示す名辞を列挙するのではなく、それぞれの資料群のコンセプトを示す文章（フレーズ）として表現している。

図書館ではこれを利用者に提示するにあたり、見出し板を書架に設置するとともに、配布資料にはその分類が内包する資料の範囲を示し、また、対応するNDCの分類番号の例を示すなどして、利用者の探索を補助することとした。

通常、図書館員が行う分類作業のプロセスは原則的に、図書がもつ主題を分析し、それを分類記号に変換するという順を経ている（実際には、既に図書の書誌情報に付帯している分類記号を参考にする事例が多い）。

しかし今回は、図書館員ではなくこのコレクションに関わるメンバー（司書を含んではいるが）で分類する必要がある、少し時間を要した。年度末ということもあり実際に資料をこれらに割り当てる作業はやや遅れ、確定したのは2019年4月上旬になってからのことであった。

表2は、第1次選定139タイトル202冊の図書をこの分類に割り当てた結果である。

<表2 第1次選定における分類別資料数>

分類	タイトル数		冊数		複本数
a	15	10.8%	22	10.9%	7
b	18	12.9%	27	13.4%	9
c	17	12.2%	24	11.9%	7
d	12	8.6%	15	7.4%	3
e	11	7.9%	21	10.4%	10
f	10	7.2%	13	6.4%	3
g	13	9.4%	17	8.4%	4
h	14	10.1%	22	10.9%	8
i	11	7.9%	17	8.4%	6
j	18	12.9%	24	11.9%	6
	139	100.0%	202	100.0%	

b（教師について）がわずかに多く、d～f（子ども・学校関係）およびi（現代社会・時事関係）が若干少ないが、分類による極端な資料数の偏りは見られない。第1次選定の時点ではまだ

これらの区分は存在せず、コンセプトに基づいて購入したことを考えると、ある程度適正な区分になりえたのではないかと見ることができる。

そして上述のとおり2019年度中に資料の追加があり（2019年度末時点で209タイトル・279冊）、これを分類別によると表3のようになる。

<表3 2020年度開始時点の分類別資料数>

分類	タイトル数		冊数		複本数
a	25	12.0%	34	12.2%	9
b	26	12.4%	35	12.5%	9
c	22	10.5%	29	10.4%	7
d	25	12.0%	28	10.0%	3
e	20	9.6%	31	11.1%	11
f	14	6.7%	18	6.5%	4
g	23	11.0%	28	10.0%	5
h	20	9.6%	28	10.0%	8
i	14	6.7%	21	7.5%	7
j	20	9.6%	27	9.7%	7
	209	100.0%	279	100.0%	

この段階では分類ごとの資料分布に少し変動があり、a～eに比重を置くようになっている。これは、2019年の教育分野の出版動向とも関連しているが、多様性やいじめなど、いくつか重点的に選んだ主題もある。

ここまで述べてきたように、このコレクションにおいてはNDCとは無関係に資料を選定し、排列している。しかし、これをあえてNDC別に再整理した場合、どのような分散になるか検証してみる。

2020年度開始時点での209タイトルにNDCによる分類を与えてみたところ、ちょうど100種類の詳細な分類記号に分けることができた（付与にあたっては国立国会図書館等の書誌情報に付与されたNDC分類を参考にしたため、図書館蔵書に実際に適用される分類とは必ずしも一致しない）。

表4は、そのうち付与数の多かった上位5位のNDC分類およびその項目名（NDC新訂10版による）と、付与したタイトル数である。これを見ると、374.3教職員や371.42問題行動などは、いかに

もこのコレクションの趣旨に沿っていることが明らかである。このうち372.107は「戦後の日本教育史」だが、歴史と同時に「事情」を含んでいるため、教育・学力格差など時事的なことを解説した図書がここに含まれている。

<表4 NDC付与項目上位>

NDC分類		数
374.3	教職員	13
372.107	〔日本教育史・事情〕 昭和時代後期、平成時代1945—	12
371.42	問題行動：不登校〔登校拒否〕、引きこもり、校内暴力、いじめ、子供の自殺、家庭内暴力、思春期暴力	11
370.4	〔教育〕 論文集、評論集、講演集、会議録	9
371.3	教育社会学、教育と文化	8

また表5は、NDCの第3次区分（3桁の記号によって表される小区分）ごとのタイトル数である。このレベルまで分類をまとめると、資料の主題の集中／分散の状況がおおよそ可視化される。

<表5 NDC分類による主題の分布>

NDC10版 第3次区分	数	比率
002 知識、学問、学術	7	3.3%
007 情報学、情報科学	1	0.5%
017 学校図書館	1	0.5%
021 著作、編集	2	1.0%
070 ジャーナリズム、新聞	1	0.5%
100 哲学	2	1.0%
141 普通心理学、心理各論	4	1.9%
143 発達心理学	2	1.0%
159 人生訓、教訓	2	1.0%
210 日本史	1	0.5%
281 〔伝記〕日本	1	0.5%
311 政治学、政治思想	1	0.5%
319 外交、国際問題	1	0.5%
320 法律	1	0.5%
331 経済学、経済思想	1	0.5%
334 人口、土地、資源	3	1.4%
336 経営管理	1	0.5%
361 社会学	7	3.3%
364 社会保障	1	0.5%
366 労働経済、労働問題	1	0.5%

367 家族問題, 男性・女性問題, 老人問題	15	7.2%
368 社会病理	3	1.4%
369 社会福祉	6	2.9%
370 教育	13	6.2%
371 教育学, 教育思想	42	20.1%
372 教育史・事情	23	11.0%
373 教育政策, 教育制度, 教育行財政	2	1.0%
374 学校経営・管理, 学校保健	20	9.6%
375 教育課程, 学習指導, 教科別教育	12	5.7%
376 幼児・初等・中等教育	10	4.8%
377 大学, 高等・専門教育, 学術行政	3	1.4%
378 障害児教育 [特別支援教育]	2	1.0%
379 社会教育	2	1.0%
384 社会・家庭生活の習俗	1	0.5%
402 科学史・事情	1	0.5%
404 [自然科学] 論文集, 評論集, 講演集	2	1.0%
407 [自然科学] 研究法, 指導法, 科学教育	1	0.5%
410 数学	1	0.5%
493 内科学	2	1.0%
496 眼科学, 耳鼻咽喉科学	1	0.5%
504 [技術, 工学] 論文集, 評論集, 講演集	3	1.4%
816 [日本語] 文章, 文体, 作文	2	1.0%
910 日本文学	1	0.5%

371教育学, 教育思想が全体タイトル数の20%を超え, 372教育史・事情も11%である。教育の下に分類されるもの(370/379)のタイトル数は129であり, コレクションのタイトル数の61.7%にもなる。一方で逆をいえば, このコレクションを構成する資料の約4割が「教育以外の分野からも選定した」という考察も成り立つ。

教育以外の分野で資料が集中しているところとしては, 367が挙げられる(15タイトル)。このうち貧困(367.61)6タイトルと, 家族関係(367.3)3タイトル, 計9タイトルが大部分を占めている。

分類項目名からタイトルの類推が困難ないくつかのものについて補足すると, 493.937は「小児科」神経・精神系を意味する分類であり, 『子どもたちのビミョーな本音』(武井明著; 日本評論社, 2019)と『スマホが学力を破壊する』(川島

隆太著; 集英社, 2018)の2タイトルがこれにあたる。また496.9音声・言語障害・吃音は『子どものコミュニケーション障害』(ロラン・ダノン=ボワロー著; 白水社, 2007)である。

また281[伝記]日本は, 『わたしの先生』(岩波書店編集部編; 岩波書店, 2004)であり, 著名人たちが影響を受けた教師に関するものである。NDCのルールでは, いくつかの特定領域や技芸に関する人物を除き, 280伝記の下で分類するようになっているため, 教育分野に関する人物についての図書であっても, ここに分類された結果である。

4. コレクションの運用

(1) コレクションの命名

コレクションには愛称が必要であり, 第1次資料選定に関わった3名で案を検討した。いくつかの候補の中から, 親しみを覚えてもらいやすく, かつ記憶や発音が容易という条件に合致した「GakuMon (ガクモン: ガクモンニューモン)」に決定した。これは「学問」への「入門」を意味し, 流行しているコンピュータゲームのタイトルへのオマージュでもある(図1)。

<図1 コレクションのロゴ>



(2) 資料の管理

図書館資料は原則として, 貸出を含めて利用者に提供するものであるが, このコレクションに置かれた資料の扱いについて, 計画初期段階に「貸出の可否」に関する検討があった。

授業で紹介されたり, これらの資料群を題材にレポートを提出させたりする可能性も考慮すると, 「貸出をせず図書館に常置する」という選択肢もなくはなかったが, それよりも「初学者に気

(4) 学生間のコミュニケーション

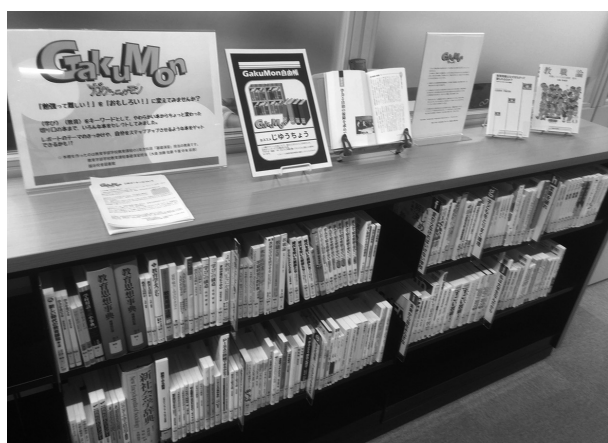
関心度チェックの補完ツールとして、(主に) 学生相互の利用に供するノート「じゅうちょう」を設置した。主に想定する利用方法としては、推薦する資料名や感想などを書いてもらうようなものである。アナログな手法だが、主たる利用者が教育学部という特性上、学校現場とも親和性の高い手段であり、なんらかのコミュニケーションが期待できるという想定のもと設置したものである。

(5) 書架の設置 (2019年5月)

コレクション「GakuMon」は、2019年5月20日、図書館地下1階電子情報閲覧室（PCルーム）前の書架に資料と什器類を設置した（図3）。

本来図書館での教育関係資料の配置は2階であるが、資料を特設かつ数年間継続できる適当な場所が2階になかったこと、また、PCルームは新入生ガイダンスの実施会場として必ず全学部学生が一度は訪れる場所であること、またPCルームは施設の性格上学部・学年をとわず利用頻度が高いことから、ここに決定した。

<図3 設置当時のGakuMon書架>



5. コレクション利用統計 (2019年度)

(1) 貸出概況

コレクションは5月下旬になってからの設置だが、すぐに貸出が動き始めた。表6は、貸出点数に対する月別・学年別の集計である。

<表6 月別・学年別貸出数 (2019年度)>

	1年	2年	3年	4年	他	合計
5月	6		3			9
6月	27	2	4	1		34
7月	26	1	8	4		39
8月				1		1
9月	3	1		6		10
10月	4	2	2	10		18
11月	7	6	2	10	1	26
12月	15	3	1	3		22
1月	4	3	4	9	3	23
2月	1		1			2
3月	3		6			9
計	96	18	31	44	4	193

この表6において「他」は、教職員の合計である。設置当初の各教員の紹介もあってか、6～7月はこのコレクションの主目的・対象である1年生の利用が多いように見える。他方、卒業研究・卒業論文への需要からか、秋学期は4年生に貸出が集中している。他方、利用者の所属・属性別にみると、表7のようになる（教育学部内の専修構成は2019年度時点のもの）。

<表7 所属別貸出数 (2019年度)>

所属	学年	小計	所属計
教育学部			95
国語専修	1	7	18
	2	6	
	3	3	
	4	2	
社会専修	1	8	8
数学専修	1	12	12
理科専修	1	2	2
音楽専修	1	11	11
美術専修	4	1	1
体育専修	1	7	7
家庭専修	1	3	3
特別教育支援専修	1	2	5
	3	3	
英語専修	1	12	16
	3	4	
児童心理教育コース	1	8	12
	3	2	
	4	2	

人間科学部			68
人間科学科	1	13	44
	2	8	
	3	2	
	4	21	
臨床心理学科	1	2	6
	3	2	
	4	2	
心理学科	1	5	18
	3	8	
	4	5	
文学部			26
日本語日本文学科	1	1	18
	2	3	
	3	7	
	4	7	
英米語英米文学科	1	3	6
	4	3	
中国語中国文学科	2	1	2
	4	1	
教職員			4
計			193

こうして見ると、教育学部学校教育課程では大部分の専修において1年生にこのコレクションの利用実績があることがわかる一方で、表6で見たような4年生への需要は、むしろ他学部（人間科学部、文学部）において高いということがわかる。特に、人間科学科と日本語日本文学科においてはすべての学年において貸出があることから、越谷キャンパスの学生の広い範囲に対して訴求できるコレクションであるとみることもできるだろう。

なお、表7のような単位で集計すると利用者の実人数は、まだ多いとは言いきれない。専修ごとの人数比もあり、この段階で実人数を示すと利用者個人が推定・特定されうるリスクが生じるため、利用者実数に関する集計は本稿では割愛する。

（2）分類ごとの利用度（関心度／貸出の相関）

4節（3）で説明したように、資料に興味をもって手に取った際につけてもらうチェックは週単位で確認している。この実績と貸出数の相関に

ついては、表8により窺うことができる。

チェックは任意であるから正確な傾向は得られないかもしれないが、まず数的に見てa分類を除き、関心度と貸出の実績はおおよそ相関関係にあるといえるだろう。

<表8 分類別関心度・貸出数>

分類	関心	貸出
a 教育って何、学ぶって何	6	17
b 教師として働く、生きる	31	35
c 社会の中の学校	18	24
d 多様なこどもの心、育ち	9	10
e 子ども世界、一人ひとりを支える	16	24
f 変わらなければいけない学校	10	12
g 子どもをとりまく環境	21	28
h 常識を破れ	11	17
i 未来から目をそらすな	6	5
j 私は大学生なんだから	14	21
計	142	193

チェック実績の上位（チェック数5件以上）は次のとおりで、【】内は分類、（）内はチェック件数（複本がある場合は合算）を示す。

- ・『「つながり格差」が学力格差を生む』志水宏吉著【g】（7）
- ・『学校の戦後史』木村元著【c】（6）
- ・『勉強するのは何のため?: 僕らの「答え」のつくり方』苦野一徳著【j】（6）
- ・『学力を育てる』志水宏吉著【a】（5）
- ・『まんがで知る教師の学び これからの学校教育を担うために』前田康裕著【b】（5）

一方、貸出実績の上位（貸出数6回以上）は次のとおりで、【】内は分類、（）内は貸出回数（複本がある場合は合算）を示す。

- ・『学力を育てる』志水宏吉著【a】（8）
- ・『まんがで知る教師の学び これからの学校教育を担うために』前田康裕著【b】（7）
- ・『スマホが学力を破壊する』川島隆太著【g】（7）
- ・『「つながり格差」が学力格差を生む』志水宏吉著【g】（7）

- ・『いじめとは何か：教室の問題，社会の問題』森田洋司著【e】（7）
- ・『勉強するのは何のため？：僕らの「答え」のつくり方』苫野一徳著【j】（6）
- ・『学校の戦後史』木村元著【c】（6）
- ・『教育社会とジェンダー』河野銀子，藤田由美子編著【c】（6）

これらを比較してみると，関心度チェックが多かったものはすべて貸出回数においても上位であることがわかり，関心度チェックと貸出数の相関関係はここからも推定することができよう。

なお，学生間の情報交換のためのノート（4節（4）参照）には期待したような効果は見られず，コレクション内推薦図書1件の記入はあったものの，あとは無関係な記述が数行あるばかりであった。

（3）既存蔵書との相関

3節（1）で述べたように，コレクションの選定にあたっては図書館既存蔵書との重複は考慮していない。第2次選定分まで含め，2019年度末現在の209タイトル・279冊のうち，開架図書との重複は145タイトル・148冊となる。

これら一般書架にあるコレクションとの重複資料が，コレクション設置後2019年度内（設置日である2019年5月20日～2020年3月31日）にどれほど利用されたか，表9および表10に示す。

<表9 重複資料（一般書架）の貸出概況>

利用者区分		貸出数
学部生	1年	74
	2年	34
	3年	36
	4年	53
大学院生	修士1年	3
	修士2年	1
教員		8
職員		5
学外者（一般・卒業生等）		7
計		221

これらに対する貸出数合計は221回であり，コレクション全体の貸出数193回と極端に大きな開きはない。

しかし，コレクション外の書架であることから利用者の属性は多岐にわたっており，次のような傾向を挙げることができる。

- ・人間科学部の利用のほうが多い
- ・湘南キャンパスの学生が利用している
- ・大学院生が利用している
- ・学外者も利用している

<表10 重複資料の属性別貸出概況>

利用者区分	貸出数
教育学部	71
（1年生）	（35）
（2年生）	（3）
（3年生）	（18）
（4年生）	（15）
人間科学部	98
文学部	20
国際学部	5
経営学部	3
大学院	4
教職員	13
学外者	7
計	221

教育学部1年生の利用が多いのは，課題等で挙げられた図書がコレクションの書架になく，代替として一般書架のものを借り出したか，あるいはその逆があったかもしれない。

（藤倉恵一）

6. コレクションの評価と展望

（1）2019年の貸出状況から見えてきたこと

ここまで図書館に設置した「初年次教育を意識した図書コレクション」の設置のプロセス，また主に2019年度の利用実績を振り返ってきた。2020年度が図書館利用についてはコロナ禍による特異な年度であったために，比較や展開の分析ができないところがあるが，教育関連の図書の中で，一

体どのような領域がどのような属性をもつ学生に興味を持たれるかについて傾向はいくつか見えてきたと言える。

まず借りられた本の領域についてみてみよう。貸出が多かった領域が「教師として働く、生きる」「子どもをとりまく環境」「社会の中の学校」「子ども世界、一人ひとりを支える」であり、少なかった領域は「未来から目をそらすな」「多様なこどもの心、育ち」「変わらなければいけない学校」であった。

これらの傾向から、教員になることを前提に、まず教員の活動を組み立てる要素についての学習を行いたい、という学生のニーズが読み取れる。簡単に述べれば、「教師になる私は教師の仕事や子どものこと、さらに学校を支える社会のことをもっと知りたい」というようなことになるのではないか。それに対して、学校のこれからやより専門的な子どもの理解はまだ先の事柄として捉えられた可能性がある。

貸出の学年を見ても、教育学部については1年生が多く、上記のような解釈が可能である。しかしさらに解釈すると、それでは学年が上がればより広範な領域への関心が生まれるかという点、貸出人数からはそのようなことは言えない。大学4年間で教育への関心や探求への意欲が果たして高まっていくのかという点については、現状の「ガクモン」からは必ずしも肯定できるものではない。

さらに本の貸出時期を見ると学期末が多く、この点をどのように解釈するかということがある。これは図書館の貸出状況全般とも関連させて考察する必要があるが、この「ガクモン」という書棚の性格作りに対して、この時期の偏りについてはさらに詳細に分析する必要がある。大学の授業とこの書棚をどのように関係づけるかということ借り出し時期との関係から検討することは可能である。この点は、さらに次の点とも関係する。

2019年度の状況であるが、「ガクモン」の中で比較的多く借りられた本が、授業で紹介された

り、レポートの課題図書であった可能性が高いという点である。学生に本を読ませるためには教員からの働きかけが意味をもつと言え、こうした働きかけは学生の読書の幅を広げる点で意味をもつということが確認できた。

しかしこの本棚の設置は、より主体的、自律的な学習としての「読書活動」を促進していくことを目的としていたことから、本来の目的を達成していくためにはさらにより工夫した学生へのアプローチが必要であるということできる。

第3に、「ガクモン」が予想以上に人間科学部の学生に多く利用されたということである。「ガクモン」が地下1階のそれほど目立たない場所にあり、この本棚の存在は口コミで広がっていく面が強いと思われ、人間科学部の学生は別の方法でこの書棚にたどり着いた可能性が高い。

この点については後に述べるが、この研究では本を「手に取る」ということを重視して、この情報収集を目指している。現在、本と出会う方法として、直接本を手に取る方法の他に、ネットなどから得た情報をもとに実物を確かめずに本を手に入れる方法も広がっている。こうした社会環境の中で、情報提供戦略がモノを売る際の成功の鍵を握ることになってきた。この情報収集の在り方の多様化、また進歩に対して、実物を見に「本棚に行く」という行動と選択の仕方が学生の学習の在り方にどのような影響を与えるかについて、今後分析していく必要がある。

（2）今後の展望と課題

それでは最後に今後の展望、必要な分析等について述べておこう。

まず、「ガクモン」が教育学部の1年生をターゲットにしていることから、この「ガクモン」に配架された書籍のさらなる分類の必要性である。すでに述べているが、この書棚はターゲットを意識して高校生向けの本や漫画なども一部取り込んでおり、この点を分析に生かすために、初級、中級といった分類をさらに行っていく必要がある。

これは分析用の分類であり、学生に対して示す分類ではないが、このような分類は一般書架ではできないことであり、この「ガクモン」という特異な書棚を作り研究対象とすることの利点である。

また上記の書棚の特殊性から考え、この書棚に置く本の種類や冊数をどのようにするかということが検討課題としてある。量、内容の点で拡大することが目的とどのように関連するのか等について、慎重な検討が必要であると考ええる。

またもう一つの課題として、「ガクモン」の周知、PRがある。2019年度の「ガクモン」の教育学部貸出者を見ると1年生が圧倒的に多い。これは初年次教育の授業での「ガクモン」についての情報提供が大きいと考えられる。またそのように考えると、教育学部の学生についてはこの書棚の本へのアプローチはOPACによる検索の結果ではなく、図書館に足を運んでの結果と推測することができる。

先に、人間科学部の学生への貸出が多かったと書いたが、この点については、人間科学部の学生と教育学部の学生の図書へのアプローチの方法には違いがあったのではないかと。図書館の利用には情報端末を用いての検索という方法と、図書館に行ってたまたま発見するという方法の2種類があると考えられるが、この「ガクモン」については後者の利用を期待しているところがある。本学の図書館は開架を原則とし、後者の貸出が可能であることがメリットであるが、さらにそのメリット拡大させようということが「ガクモン」の設置にはある。図書館に足を運ぶ行動が、偶然性がもたらす興味の拡大につながる。

そのためには、まず図書館に来てこの書棚を見ろということを行わせる工夫が必要であり、より強力なPRが必要であると考ええる。

なお最後になったが大きな課題として、2020年の現在、図書館利用が例年とは異なる状況が続いていることがある。このような状況下で分析に必要なデータ数が少なく、そのことにより属性等による詳細な分析が難しいという課題である。今後

の新型コロナ感染対策がどのように進むかが、この小さな研究にとっても非常に大きな意味をもつことを記しておきたい。

本研究は、学生の読書活動を活発化させるために、より学生にとって読書が身近になることを狙った特殊な本棚を作ることと、読書活動を活発化させるための必要な情報収集に目的がある。またその根底には受け身ではなく、より主体的な読書を導き出すことがある。まだデータは多く集まっていないが、今後はより詳細な形でデータ分析を行い、目的達成のための方法を考えていきたい。

(千葉聡子)

引用・参考文献

- 千葉聡子, 2011, 「教員養成学部で学ぶ学生に求められるべき能力についての考察—文教大学教育学部生の強さと弱さの分析から—」『文教大学教育学部紀要 第45集』, 91-108.
- , 2012, 「大学文化獲得と自主的学習者育成についての考察—文教大学教育学部生の強さと弱さの分析から(2)—」『文教大学教育学部紀要 第46集』, 13-28.
- , 2018, 「教員養成学部で学ぶ学生は小学校教育の変化と大学改革の間で何を身に付けるのか—意味を変えた文教大学教育学部生の強さと弱さ—」『文教大学教育学部紀要 第52集』, 21-39.
- 中央教育審議会, 2014, 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について—すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—(答申)」.
- 浜島幸司, 2019, 「読書習慣のない大学生の特性と傾向」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 第9号』, 77-88.
- 文部科学省, 2018 a, 「第四次子供の読書活動の推進 に関する基本的な計画」.
- , 2018 b, 「小学校学習指導要領(平成

- 29年告示）解説 総則編」東洋館出版社.
- 文部科学省, 2020, 「平成29年度の大学における
教育内容等の改革状況について（概要）」.
- もり・きよし原編, 日本図書館協会分類委員会改
訂, 2014, 「日本十進分類法 新訂10版」日本
図書館協会.
- 初年次教育学会, 2007, 「初年次教育学会設立趣意
書」 <http://www.jafye.org/society/prospectus/>.
(取得日2020年9月10日).